



「お母さん」

【山形県】ふじもと きよみ 藤本 清美 42歳

15年前、陣痛で苦しむ私に、「お母さん頑張れ！ お母さん頑張れ！」と、何度も言うナース。私はたまらず、「死んだ子を産むんだから、私、お母さんじゃない」と、泣きながら叫んだ。すると、「何言ってるの！ 赤ちゃん産むんだからお母さんでしょ！」と、泣きながらそのナースも叫んだ。そして、静かに赤ちゃんが産まれた。男の子だった。1年後、全く同じやりとりをして2人目の子も死産となった。女の子だった。解剖が終わった娘をあのナースが連れてきてくれた。

「とっても美人さんね。お顔にはメス、入れてないからね。はい、お母さん」と言つて、娘を私に抱かせてくれた。

「またおいで！ 妹でも！ 弟でも！ ねっ！ お母さん！ 信じて！ ねっ！ 生きてね！ お母さん！」

あのナースに、私は何度も「お母さん」と呼ばれた。赤ちゃんはいないのに「お母さん」。にせものの「お母さん」だ。

次の年、妊娠した。この子も死んじゃうかも、という不安はあのナースが吹き飛ばしてくれた。「これが、心臓よ！ お母さん！」

「今日はいよいよ性別判明の日ね！ お母さん」。あのナースは、うるさいくらい私のことを、「お母さん」と呼んだ。「お母さん」と呼ばれるのがあんなに嫌だったのに、なんだかだんだん心地良く感じてきた「お母さん」という響き。そし

て産まれた。

「3人目のお子さん！ 女の子ですよ！ お母さん！」。あのナースはわざわざ「3人目」と言ってくれた。うれしくて泣いた。

娘が「お母さん」と私を呼ぶ。娘のお友達が、「イオちゃんのお母さん」と私を呼ぶ。もう15年も呼ばれているけど、毎回うれしい気持ちになるのは、天国の2人と、産まれてきてくれた娘のおかげ。あと、私を信じて、私のことを「お母さん」と呼び続けてくれたあのナースのおかげ！

ありがとう！ あのナースさん！